

令和7年度上越市・妙高市在宅医療・介護連携推進協議会

第1回対人支援スキルアップ部会を開催しました

○7月2日（水）に第1回対人支援スキルアップ部会を開催しました。参加者は、部会メンバー8人、上越地域在宅医療推進センター1人、事務局4人の13人でした。

○今回の議題

- （1）令和6年度の振り返り
- （2）次期(R8～10年度)専門部会に関して意見交換
- （3）事例検討

○部会での検討事項等

（1）令和6年度の振り返り

令和6年度の取組

- ・部会の中で事例検討を行い、対人支援の立場で大切だと思うことを話し合うことで、気づきや学び等につながった。
- ・研修パッケージを用いた研修会を実施し、多職種で対人支援について意見交換を行い、支援者の意識の変化を確認することができた。
- ・研修パッケージの活用拡大に向け、チラシと短縮版動画(90分→60分)を作成。

令和7年度に向けて

- ・誰もが気軽に研修会を開催できるよう、研修のパッケージや環境づくりについて検討する。
- ・職能団体や関係機関へ研修パッケージの案内等を行う。

⇒誰でも使いやすく、学んでもらいやすくなるようにしていきたい。

（2）次期(R8～10年度)専門部会に関して意見交換

- ・今ある連携ツールをより有効活用できるように学習する場があるといいのではないか。
- ・テーマを認知症に限定し、認知症サポーター等、認知症のかたにかかわる市民のかたにも参加してもらう部会にしたらど

うか。

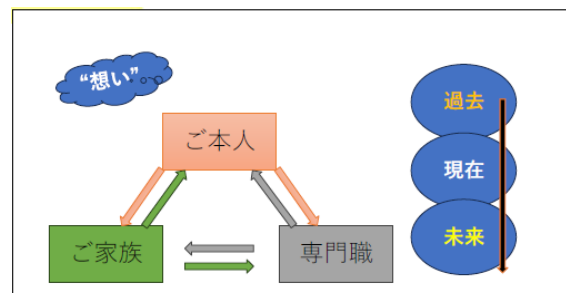
- ・多職種での事例検討や担当者会議を繰り返すことで、医療と介護の連携を推進することができるのではないか。
- ・医療と介護の連携において、退院時が現在の課題になっているように思っており、病院と介護職の考えのギャップを埋めていく必要がある。ギャップを埋め、病院側で在宅での生活までイメージした支援ができるように、介護側は在宅の情報をきちんと病院側に伝えられる体制を作ることが大切。

（3）事例検討

【重度の認知症を患ったかたへの支援で苦慮した事例】

◇感想・気づき◇

- ・家族が本人の状態を受け入れられていない可能性がある。家族の受容のステップを理解しながら話ができるといいのではないか。
- ・専門職の思い込みや意見を押し付けてしまっていた可能性がある。
- ・レビー小体型認知症はリアルな幻視があり、視覚に関連した怖い思いをしていることが多い。なぜ攻撃的になっているのか、幻視があることも視野に入れて考えていくことが大切。
- ・思いを時系列に整理し、話をする事で家族も気持ちを整理しやすくなる。



○次回：8月下旬から9月上旬を予定